

伊豆市美術館建設に向けた取り組みについて

伊豆市教育委員会・社会教育課

1. 経緯

伊豆市が所蔵する日本画は、平成元年に相原家（新井旅館）から寄附された作品を中心に、横山大観をはじめ安田靉彦、小林古径、前田青邨や川端龍子など近代日本画の巨匠の作品 117 点で構成されています。寄贈者と旧修善寺町との間で、美術館を建設し展示活用してゆくこととなっていたことから、これらの作品は、定期的に旧修善寺郷土資料館で展示公開してきました。

しかし、同資料館が、閉館となり、伊豆市所蔵の美術品を展示公開できなくなりました。

伊豆市教育委員会では、当分の間、他の美術館への美術作品の貸出し等により、適正な保管と伊豆市のPRと文化交流を進めています。

平成 26 年度、伊豆市所蔵作品の展示を含めた美術館の建設について、有識者らによる「伊豆市美術館建設準備委員会」を立ち上げ、美術館基本構想の策定に向け取り組んでいます。

2. 第 2 次伊豆市総合計画の位置づけ

伊豆市では、平成 28 年 3 月、平成 37 年度末を目標年次とした第 2 次伊豆市総合計画を策定した。計画の基本方針は「自然・歴史・文化が薫る誇りと活力に満ちた『伊豆半島の新機軸』・伊豆市である。2020 年、東京オリンピック・パラリンピックの自転車競技の伊豆市開催を機とした伊豆市独自の文化振興施策の取り組みも重要課題です。

『伊豆市美術館の建設』については、総合計画の前期基本計画には、「伊豆市所蔵の美術品等の公開と美術館建設に向けた計画策定」が明記されています。

伊豆市の基幹産業である観光産業との相互連携による文化振興、地域活性化、観光振興等の街づくりの一環として美術館の必要性、あるべき姿を検討してゆく必要があります。

3. これまでの取り組み

平成 27 年度

1) 平成 26 年 12 月 伊豆市美術館建設準備委員会設置要綱制定

2) 平成 27 年 2 月 第 1 回伊豆市美術館建設準備委員会開催

委員名簿は別紙のとおり。委員任期は平成 28 年 3 月末までの 2 年間。（現在、平成 29 年 3 月まで任期を延長済）

作業スケジュールを検討。課題洗い出し、基本構想策定を経て平成 34 年度完成を目指すことを目標に準備作業を進めることを確認した。

3) 平成 27 年 10 月 第 2 回伊豆市美術館建設準備委員会開催

基本構想について意見交換。美術館のコンセプト。候補地、規模、必須施設について意見交換を行う。静岡市美への貸し出し展示等の計画を報告。

4) 平成 27 年 12 月 第 3 回伊豆市美術館建設準備委員会開催

教育委員会としては建設に向け万全を期すが、そのためには市民や議会に対し、建設地や運

管についても地域や市民の理解と協力が不可欠という考え。市民の理解を深めるため「市民フォーラム」について内容を検討した。

5) 平成28年 2月25日(木) 市民フォーラム開催

伊豆所蔵品のコレクション作品の魅力を市民に知っていただき、これらの作品の展示・活用ができる美術館建設について市民から意見をいただいた。

○基調講演 「修善寺ゆかりの近代日本画 巨匠たちの青春」

○講 師 東京藝術大学大学美術館 古田 亮 准教授

準備委員会の委員でもあり、近代日本美術史に造詣の深い古田氏より5つの魅力を中心に、映像を交え作品が持つ魅力や価値について市民に紹介。

- ①近代日本画を代表する「巨匠」たちが、若いころ、何故修善寺温泉に集い、その作品が今残されているのは何故か？その理由が作品の価値を高めている。
- ②新井旅館3代目当主相原貫太郎（沐芳）」と安田軋彦（病弱で温泉で療養）を中心とする人と人とのつながり・人間ドラマにより、「自然に形成された作品群」である。このことは、歴史的にも地域的にも非常に貴重である。
- ③近代日本画が最も「熱かった時代・輝かしかった時代」を背景に、西洋文化に負けないよう「朦朧体」という特徴による「日本画の創造」しようと、修善寺温泉の交流を通じて、画家たちが切磋琢磨した時代背景の中での作品群。それは、「時代そのものを切り取る面白さ」として「生きいきとして活気がある作品」が集まっていることも魅力である。
- ④質の高い作品は、見る人に感動を与え、文化を育てる。400年前の俵屋宗達の作品展を通じ、画家や芸術家が刺激を受け成長するように。そのためには作品を展示する良好な環境と作品を大切に保存しなければならない。
- ⑤こうした魅力あふれる作品が、ただ保存されるだけでは意味がなく、作品の魅力を「次代に繋ぐ」ことが大切である。伊豆市民として、この作品の魅力を次世代・子どもたちに伝承するために「環境の良いところ」に「良い保存状態」が保てる「美術館」の建設は義務であるとも言える。子どもたちは、作品の魅力を「美術館」で学び、刺激を受け、人の成長にも寄与するもの。

パネリスト、参加者の意見等は別添資料

伊豆市
平成28年(2016年)2月27日 (土曜日) HTU

美術館建設へフォーラム

4有識者、必要性や提案



伊豆市美術館建設の必要性や提案について、25日(木)に開催された市民フォーラムで、4人の有識者が意見を述べた。会場には約100人が参加し、活発な議論が行われた。

基調講演を行った古田准教授は、近代日本画の巨匠たちが修善寺温泉に集った理由として、自然環境や温泉療養の歴史を挙げ、その作品の価値を高く評価した。また、修善寺温泉の歴史や文化について詳しく説明し、市民の理解を深めた。

パネリストとして参加した4人の有識者は、美術館建設の必要性や具体的な提案について意見を述べた。中には、修善寺温泉の歴史や文化をテーマにした展示を希望する声もあがり、市民の関心の高さが窺えた。

フォーラムは、市民の理解を深め、美術館建設の必要性を伝えることができた。今後の美術館建設に向けて、市民の意見を参考に進んでいく予定である。

「市長キャララリ」併設を



伊豆日日新聞
 〒410-0927
 伊豆市本町1-1-1
 TEL 0558-761-4760
 FAX 0558-761-4725

平成 28 年 6 月 22 日 土肥支所 4 階	15 名	<p>【美術館への要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般家庭に眠っている貴重な資料も津波や災害の危険があるので新しい美術館に収蔵してもらいたい。 ・ジオや博物館などの機能も併せ持っても良い ・文学関連の展示や、市民の作品展示スペース希望 <p>【建設地について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建設地は修善寺地区以外に考えられない。 ・文教ガーデンの中ではどうか？
平成 28 年 6 月 23 日 天城保健 センター	22 名	<p>【美術館への要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術館はあって然るべき ・美術を通じて伊豆市の歴史が学べるような施設 ・市内在住の陶芸家などの作品も展示してほしい ・関わりがある狩野派の作品も展示してほしい ・景観に配慮した建物にしてほしい <p>【建設費用について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建設費やランニングコストも考えてもらいたい ・建設で地区補助金が更に減っては困るので、考えて進めてほしい ・健全な運営をしてほしい <p>【建設地について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湯ヶ島が良いが修善寺温泉場か駅周辺に ・湯ヶ島に近い所に建設してほしい
平成 28 年 6 月 25 日 中伊豆支所	17 名	<p>【美術館への要望】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修善寺と美術の関係を企画展や市民ギャラリーで発信できる施設にしてほしい ・郷土で活躍した（している）方の作品を展示してほしい ・市民ギャラリーを作してほしい ・伊豆市産の木材を使用した温かみのある建物 ・伊豆市の特色を生かし、観光資源となる美術館を ・日本画を学べる美術館（認知症予防や作品をお土産として持ち帰ることができるような機能）
計	54 名	

2) 静岡市美術館「伊豆市所蔵近代日本画コレクション展」開催

平成 28 年 6 月 7 日（火）～ 7 月 10 日（日） 期間中来館者数 6,592 名

伊豆市民向け 見学会の開催 6 月 9 日（木）実施 26 名参加

6 月 26 日（日）実施 26 名参加

3) 平成 28 年 6 月 17 日 平成 28 年度 第 1 回伊豆市美術館建設準備委員会開催

委員長に原京氏、副委員長に田中之博氏を選任。基本構想骨子案の策定について協議
市民フォーラムを踏まえた項目出しを検討。12 月を目途に答申書の作成を行うことを確認
骨子案は、市民やフォーラムの意見をまとめ、事務局で素案を作成し、次回に示す。

4) 平成 28 年 8 月 24 日 平成 28 年度 第 2 回伊豆市美術館建設準備委員会開催

基本構想骨子案の内容を協議。事務局案では、意見の列記となっているので、重要な内容は
文章化し、簡素化すること、実現困難な具体的な記述は避けることを基本に素案の見直しを
行う。はじめに、第 1 章（美術館の必要性）、第 2 章（美術館のコンセプト）、第 3 章（求
められる機能）について委員の意見を集約化。重複内容と整備計画、財源は記述を削除

修正案と第4章（整備のあり方）第5章（管理運営のあり方）は次回改めて検討する。

『はじめに』は全体の検討を行ったうえで再度作成することを確認した。

- 5) 平成28年10月12日 平成28年度 第3回伊豆市美術館建設準備委員会開催
基本構想骨子案の内容について協議。前回の指摘箇所の修正確認、第4章（整備のあり方）
第5章（管理運営のあり方）の記述について意見を集約した。
事務局で素案を作成し、次回に示すが、委員が編集に関わる仕事をしていることから、はじめに、第1章（美術館の必要性）、第2章（美術館のコンセプト）を作成し、次回提示してもらうこととした。原委員長より『沐芳コレクション』の考えを素案に位置付けてはとの提案もあり、これらを盛り込んだ素案作りを行うことを確認した。
- 6) 平成28年11月18日 平成28年度 第4回伊豆市美術館建設準備委員会開催
相原委員作成の「はじめに」第1章（美術館の必要性）、第2章（美術館のコンセプト）を再度協議。「はじめに」は長文となったため、簡素化の方向で見直す。一部を、「終わりに」又は「建設に向けて」として修正。再度、委員に修正作業を依頼した。
当初は12月の答申を目指すはまだ修正箇所や確認作業が必要との判断から、12月に再度委員会を開催し、答申の時期を1月以後に先送りすることも併せて確認した。
- 7) 平成28年12月20日 平成28年度 第5回伊豆市美術館建設準備委員会開催
前副委員長の田中之博さんの急逝（12月8日）を受け、後任の副委員長に古田氏を選任。
委員長より、本日の会議で案を集約。細部の調整は委員長に一任することを確認した。
1月17日に原委員長より教育長に構想案の答申、1月24日に教育委員会に報告する。

構想案の内容は別紙のとおり。概要は以下のとおり。

伊豆市は、以下の必要性から、理念に沿った機能を有し、市民や訪れる人に愛されるコンパクトで上質な美術館を、作品ゆかりの地修善寺温泉地内に、建設地を求め建設し、文化観光振興と地域の活性化を目指すことが望ましい。

必要性

- ・作品を生んだ修善寺温泉と沐芳コレクションを市民の宝として保存、活用、次世代に繋ぐ
- ・地域文化醸成の拠点として美術品を通じた市民や観光客への情報発信と創作活動を担う。

必要な機能

- ・展示機能、収集・保管機能、教育普及機能、情報発信機能、ユニバーサルデザイン機能
コンセプト（理念）
- ・適正な美術品の維持管理を行う。新たな地域文化創造拠点となる。まちに息づく地域密着型・愛される美術館

管理運営 市民負担とならないような維持管理、地域密着・官民協働による運営

【参考資料 1】

【市民フォーラムでのパネリストの意見】

No	意見内容
美術館の必要性	寄贈された多くの美術作品を市民の宝として後世に伝える「館」が必要であり、それは より良い環境で見る「場」があってはじめて意味をなす。
	美術館は、どのような場所にも必ず必要、という施設ではない。 核になるコレクションの存在や、新設される美術館での活動についての地域からのご理解等、ニーズがあってこそ美術館です。幸い、伊豆市には、旧修善寺町以来の美術品も受け継がれており、多くの美術館から借用依頼が続いていると聞きます。市民が誇るべき作品を正しく管理し、後世に伝えていくためにも、適切な美術館での（作品）の管理が必要だと思います。
	旧修善寺町時代に相原家より寄贈受けた近代日本画作品を核とするコレクションは、現在近代日本画の巨匠と呼ばれる画家たちの若い頃に描かれた貴重な作品群で、その美術的・文化的な価値は高く、観光資源とも成り得るものを、他館展覧会への貸出だけで始終しては死蔵と同じ。寄贈時に進められていた美術館建設を早く実現し、恒久的な保存・展示をしていかなければならない。
	伊豆市では百数十点もの芸術作品を所蔵し管理していると聞きます。以前は、修善寺総合会館で展示をし、時々鑑賞に出かけましたが、今ではその場所もなく、他の美術館の企画展に貸し出すばかりです。市外で伊豆市の所蔵する美術作品を鑑賞していただくばかりではなく、伊豆市で展示して、市民はもとより様々な方々に伊豆市に訪れていただき、鑑賞してもらってもいいのではないかと。伊豆市で展示する意味は大きいと思います。
美術館が果たすべき役割	ヒトとモノが出会う場所を提供すること。
	美術展示品が美術展示品を呼ぶ。この作品があるからこの作品を呼ぶことができると思う。3つの役割を担います。 第1に、美術館は美術品を保存し、そして公開していくのが役割です。美術館の所蔵品だけではなく、伊豆市には、指定未指定を問わず、多くの文化財や美術品があるでしょう。それらを大事に保っていくためにも、専門家を擁する美術館という施設は重要です。 第2に、美術館は、既に所蔵している美術品だけではなく、これから作られる美術品のためにも役立ちます。同時代を生きる作家が、縁有って伊豆市で作品を制作することもあるでしょう。アートイベントのようなものかもしれませんが、滞在して制作に取り組むこともあり得ます。それらは伊豆市の皆さんにとって、より身近なものになるかもしれません。 第3に、美術館は、皆さん自身が美術と関わるための場所です。関わり方は色々。 ご自分の趣味や勉強として作品を鑑賞するもよし、誰かを案内するも良いし、あるいはボランティアや友の会等で、運営に関わることもできるのかもしれませんが。
	美術作品やそれに関わる資料・情報を集め、保存・研究・公開を通して、未来の世代に伝えていく役割を基本的に担うべき施設で、コレクションの展示公開活動及びそれに付随する教育普及活動などを通して、地域社会と連携していくこと、つまり、市民との交流を大切にしながら共に文化創造を実現していく拠点となることが使命です。
	文化芸術作品や遺産の収集・保管・展示が一般的な美術館の役割と習いました。 市民が芸術への関心意欲を高め、理解される教養が高まれば…。市民に限らず多くの人たちに伊豆市所蔵の芸術作品を知ってもらうことも大切かと思えます。観光資源としての役割を果たしても良いように思えます。
身近な美術館とは	「私の」美術館と感じさせる場所にする。市民が育てていく美術館になること。
	美術館とは色々な関わり方があると思います。皆さんが「どのようにしたいか」によって、様子は変わります。こうしたフォーラムの場等を通して、どのような美術館がいいのか、どんな場所であって欲しいのか、皆さんのご意見をお聞かせ頂くことが関わりの第一歩です。今日来場している皆さんは、美術館との関わりを、もう初めて下さっているのです。
	一例をいえば、単に芸術性の高い美術品に触れるだけでなく、その建築 空間や静かな庭園、その環境に適したカフェやミュージアムショップなど、収蔵美術品を中心として市民が気軽にアート空間を楽しむことのできるような施設。家族と行きたいと思えるような美術館。市民が行きたくない美術館は、他市町の人も行きたいとは思わない。
美術館の構造	一度鑑賞したら終わりではなく、興味ある企画展が度々催され、常に行ってみたいという気持ちにさせられる美術館が身近に感じます。 市民が誇れる。親しめるような美術館が良いと感じる。
	美術館は作品を大事に保存する場所であり、作品をお客様にご覧頂く場所です。 作品の安全を確保するためには、色々とお気をつけなければなりません。泥棒に入られないような、しっかりとした警備は大前提です。 さらに、温度や湿度を、年間を通じて一定にできるような空調施設が必要です。湿気や温度の変化にさらされると、作品は簡単に壊れてしまいます。一度壊れてしまった作品は、たとえ修理が出来たとしても、元に戻ることはないのです。さらに、作品を正しく管理するためには、作品を保管するための収蔵庫や、調査のための資料を置く部屋等々が必要です。

美術館の構造	つまり、美術館の建物では、お客様がご覧になる部屋だけではなく、作品を管理するためのバックヤードが、かなりの部分を占めます。その裏付けがあるからこそ、他の美術館や博物館は、安心して資料を貸してくれます。そうなれば、色々な展覧会を企画することもできます。伊豆市の皆さんが、他の地域から借りてきた作品を見ることが可能になるのです。
	運営側としては、作品を中心に据え、恒久的な保存・展示が実現できる構造、鑑賞者側にとっては観る・学ぶ・体験することを基本として実現できる構造。 身の丈にあった美術館を設立するのが大切・自然豊かな伊豆市の温泉場に大きな美術館がある方がイメージ化しやすい。
	展示室（企画展示室）・市民ギャラリー・保管管理室など。市民ギャラリーのように、市民の作品の展示や個展、また児童生徒の作品が展示できるようなスペースがあると一般が足を運びやすいように思います。
美術館の機能	所蔵品の保管と展示、そして研究の場にもなる。
	「美術館が果たす役割について」で挙げた3つの役割、「保存」「現代の美術活動」「技術の体験」を十分に果たすような機能が必要である。
	美術館の構造は、どのような機能実現するかによってきまるので、運営者側・鑑賞者側の実現項目を基本とした機能を備えたもの。ということになります。
必要な部屋	単なる展示のみではなく、講演会やギャラリートーク、ワークショップなど美術作品を理解するような場の設定や機能があるとありがたいです。日本画については、画材や描き方について（日本人でありながら）あまり知られていないように感じます。日本画の制作方法や歴史などについても学べる、あるいは知る場があると良いように思います。
	展示室、収蔵庫、荷解き場、写真撮影室、本や資料を置いておく部屋、実技室、お客様が資料や美術情報を自由に得られる部屋、バックヤード、ミュージアムショップなど。美術館の周囲に飲食店が多々あるなら、館内には不要でしょう。
	所蔵するコレクションに適合した展示空間。最大級の所蔵作品（今村紫紅：鷲） 作品の多くは沐芳氏の寄贈による作品です。しかも、有名な日本画家の若い頃の作品です。沐芳氏によって多くの日本画家が育てられました。その遺志を継ぐならば、その美術館で日本画に限らず公募展が実施され、多くの若手の芸術家を発掘し育てられたら素晴らしいと思います。教育関係者の視点では、「市民ギャラリー」みたいなものがあるとすごくうれしい。市民の作品や古典など、あるいは子どもたちの作品が展示できるようなことができれば大変うれしい。
運営方法	公設美術館の運営は、自治体が直接運営するやり方、別の法人が運営するやり方、会社等に業務を委託するやり方等、色々なものがあります。 個人的には、自治体が直営する仕方が、最も望ましいと思っています。 美術館は元々、大きな収入につながるような施設ではなく、だからこそ公が費用を出して、みんなのためになることをやる訳です。
	自治体運営、指定管理者制度での運営、財団化した運営いずれにしてもメリット・デメリットはあります。
	市営美術館。学芸員の方を中心として企画・展示・運営でしょうか。どんな仕事があるのか整理して、ボランティアの方が多く加わってくると良いと思います。何か、伊豆市の美術館としての特徴があるといいと思います。具体的なアイデアは今の時点ではありません。
準備	上記の美術館使命を担う近代日本画を専門とする専門職学芸員を招致し、建設関係業務に参加してもらう

【参考資料2 市民フォーラムでの参加者からの意見】

意見美術館は必要であるが、将来に負担を残さないようにしてほしい。
必要である以上に必要。沐芳氏が集めた作品は寄贈を受けた旧修善寺町が大事にするということでもいただいたもの。新井旅館の近くに建設することが重要。
市所蔵の作品は大切にしてほしい。
美術館建設に賛成。若い世代に興味がないのが問題。美術館の役割を伊豆市民に説明していくことが大切。
ただ所蔵しているだけでは宝の持ち腐れ。見る機会を与えることが重要。まだ眠っている作品や無名な作家の作品、市民の作品を展示していくことも美術館の使命であると思う。
美術館は必要。土肥の海藻おしばなども美術館にあってもよい。関心がない人や子どもにも興味を持ってもらうようなものが良い。
新井旅館がキーワード。修善寺温泉に作るべきであると思う。
下田市の開国博物館に行ったが、解説がわかりやすく感動した。わかりやすい解説が受けられる美術館をお願いしたい。
一日も早く修善寺温泉の近くに美術館ができることを望む。その間、美術品を収蔵庫で眠らせているだけでなく、なるべく良い美術館に貸し出しをお願いしたい。
何を発信していくのが大切。どういう名称にするのかも検討してほしい。
今後もフォーラムを続け、多くの市民の意見を聞いて、計画づくりをお願いしたい。
場所は修善寺も良いが旧湯ヶ島小学校の跡地でもよいと思う。地元が活性化するような美術館が良い。

< 沐芳コレクションについて >

伊豆市が所蔵する日本画コレクションは、相原家（旧修善寺町）・石井家（沼津市）・川端家（東京都）から旧修善寺町に寄贈されたものです。いずれも明治後半から大正・昭和期にかけて描かれた作品で、横山大観に代表される日本美術院の画家たちのものが大半を占めています。

またその中で、大観より一世代若い今村紫紅・小林古径・安田靉彦・前田青邨・速水御舟といった画家たちが、明治 30 年代から大正初期にかけて紅兎会（こうじかい）というグループを結成し、新しい歴史画を創造するための研鑽に励んだ頃の作品がまとまって残されていることは、大きな特色となっています。

伊豆市所蔵の日本画コレクションの中核をなすのは、相原家からの 109 点にも及ぶ寄贈品であり、相原寛太郎氏（1875 - 1945、号は初め天城（てんじょう）、後に沐芳（もくほう）、以下沐芳と称す）が収集したものです。まさに「沐芳コレクション」（以下「コレクション」と称す）と呼ぶにふさわしい作品群となっています。

沐芳は明治 8 年、静岡県駿東郡大平村（現在の沼津市大平）に生まれ、東京で勉学を修めた後、修善寺温泉で旅館業を営む相原家の婿となり、同家の旅館「新井」（以下、新井旅館と記す）の 3 代目当主となりました。当時の修善寺温泉は、交通網の整備とともに遠方から多くの湯治客を迎えて繁栄をみせており、そこには皇族方をはじめ、政治家・文人墨客など数々の著名人の姿もありましたが、沐芳の元にも芥川龍之介・岡本綺堂などの作家や、大勢の画家たちが逗留しました。沐芳は若い頃画家を志したことがあるほどに絵を愛し、旅館の主人となってからも自ら絵筆を執りつつ、多くの芸術家たちを大切にすることに情熱を注ぎました。彼らは沐芳から手厚いもてなしを受けながら霊泉の恩恵に浴し、創作にも励みました。沐芳自身も宿の主人という立場に留まらず、彼らの良き理解者、助言者となりました。

さらに再興日本美術院の賛助員や若手画家の後援会会員にもなって、彼らを支援しました。このような状況の下、多くの作品が沐芳のもとに集まりました。のちに大成する若き日の画家の作品は将来を予感させる精巧なテクニックと迫力あるエネルギーに満ち、大変魅力に富むものでした。

先述のように、このコレクションの構成メンバーとしては日本美術院系の画家が多くなっていますが、この状況は沐芳が親密に交際をした画家との関係を、そのまま反映したものとなっています。その中で安田靉彦は、沐芳との親交の深さから言っても、残された作品数から言っても、コレクションの中で最も重要な存在として特筆されています。ふたりの親密な交流は、靉彦が明治 42 年に病氣療養のため約 5 ヶ月間を修善寺で過ごした際、沐芳から物心両面でさまざまな支援を受けたことに始まりますが、その関係は生涯続きました。伊豆市所蔵の靉彦作品は、彼が修善寺・沼津に滞在した明治 42 年から 44 年にかけてのものが多くですが、他にも靉彦の最初期の代表作である「吉野訣別」から、療養生活後、画壇に復帰し活躍した大正・昭和期の作品まで含まれています。その主題も、歴史画を中心としながら、花鳥画や富士の絵などバラエティーに富み、45 点の靉彦作品を通じてその芸術の諸要素に触れることができます。

また靉彦は、他の画家を修善寺の沐芳と結びつける上でも大きな役割を果たしました。横山大観の場合には、明治末頃、夫人の病氣療養のためしばしば沼津を訪れていた際に、沼津在住の

安田鞞彦から沐芳を紹介されたものと推測されています。さらに鞞彦の修善寺・沼津時代は、紅兎会で活動をした時期とも重なるため、その仲間たちもまた鞞彦のもとを訪れ、彼を介して沐芳と親しくなったようです。中には石井林響・広瀬長江のように、鞞彦より早くから沐芳の世話になり彼のもとに長期滞在した画家もいますが、コレクションの中に紅兎会の作品が多く含まれている背景には、以上のような状況があったものと思われます。

その成り立ちを一言でいえば、伊豆を愛した画家たちと地元の人々との交流の中で育まれたコレクションであり、作品にはそれぞれ、画家の真摯な情熱と、それを大切に守り伝えた地元の人々の思いが込められているものと言えるでしょう。